夏休み
Count Down
カウントダウン ボーイズ！
Boys!
ショタっ子が乗ってます
成人向
FOR ADULT ONLY

DiGiket.com

夏休み
Count Down
カウントダウン ボーイズ！
Boys!
木炭

「ナツ！ずいぶんデカいテントだな！」
「あっ潤矢センパイ！早かったですね。へへっ、風呂で先輩達に全身とチンチン弄られて射精したんだけど、一回射精したくらいじゃガチでフル勃起したまんま治まらなくて」
明日から夏休みという七月下旬のある日、学生寮にある大浴場の脱衣所で、風呂上りにジャージの股間をめいっぱい盛り上げている新入生の言葉に、中等部三年生の池澤潤矢の表情が一気に硬くなる。
「またタクヤ達だな。ナツ、そういうのが嫌ならはっきりと言えよ。それでも無理にヤルことはこの寮では許されない。この寮はいろいろと超ユルいけど、それだけは絶対の掟だからな。変な遠慮はするな」
ボクサーブリーフ一枚の姿で、急に真剣な表情になって心配そうに説く潤矢に、心配された中等部一年生の結城夏輝は目を丸くして驚く。
「えっ？あ、いや、大丈夫っす。っていうか、最近はむしろ悪戯されるのが楽しみになっちゃってて俺！」
そう言って陽気に照れ笑いする夏輝に、潤矢は微妙な表情で呻く。
「う～ん、突っ込みどころが多すぎるな。少し詳しく聞かせてくれ。オレもすぐ風呂入っちゃうから、ホールで待ってろ。いいか？」
潤矢はそう言いながらボクサーブリーフを脱いで全裸になる。
「はいっす！」
夏輝は、目の前で丸出しになった潤矢の形も大きさも完璧なズル剥けチンポをガン見しながら、嬉しそうに答えた。
中高一貫の私立男子校『竹鋸学園』の敷地の一番奥にある鉄筋コンクリート五階建ての、まるでマンションのような大きな建物が潤矢や夏輝が暮らしている『私立竹鋸学園学生寮わかたけ館』で、中等部と高等部の生徒を合わせて三百人以上の少年達が生活している。
一階が玄関や管理スペースのほか、大食堂兼ラウンジや大浴場などの共同スペースで、二階から上が学生達の部屋だ。
「つまり、入学・入寮した四月の初めからずっと性的な悪戯をされ続けていたということだな？タクヤ、ユウ、タケノリの三人に」
学生達にはホールと呼ばれている三百人以上が同時に食事できる大食堂兼ラウンジの片隅にある談話スペースで、髪も生乾きのまま急いで風呂から上がった潤矢は苦虫を噛み潰したような顔で呻いた。
名前の出た三人は中等部三年のサッカー部トリオで、お調子者ではあるが悪い話はない寮生達のはずだ。
そして潤矢の目の前に座って呑気な顔で笑っている褐色の少年、結城夏輝は同じラグビー部の新入部員でもあり、容姿・性格ともに今年の新入寮生では断トツの人気者で、実際に好意を寄せている寮生は数知れないが、まさか既にこんな事態になっていたとは…。
「そうっすね！入寮したその日の歓迎会で声かけてくれて、その日の晩にすぐ部屋に呼んでくれてジャージの上からチンチン揉まれました。
それから四月中はほとんど毎日、三人のうち誰かが俺の寮生活や学校の勉強の面倒みてくれて、その合間に秘蔵のエロ動画見せてくれたり、服の上から俺のチンチンや乳首やお尻を揉んだりして最後にぎゅって抱きしめてくれました。それから、五月の休み明けからは風呂でも体を洗ってくれるついでに全身を直接触られるようになって！」
「あいつらぁっ！完全にアウトじゃないかっ！」
そう叫んで立ち上がる潤矢に、夏輝は飲んでいたパックジュースを噴出さんばかりに驚いて慌てた。
「いやいや！そんな大げさな話じゃなくて！いま言ったとおり全然大したことないし、俺が嫌だって言ったことは絶対にしない良い先輩達っす！今日の射精だって、たまたま風呂に他に人がいなくなったんで、俺が『あのエロ動画みたいっすね』って先輩達を煽ったせいだし」
夏輝の言葉からは本当に問題だと思っていない様子が伝わり、潤矢は少しほっとしたのと同時に、今度は別の不安がむくむくと沸いた。
「…そうか。でもなナツ、お前はただのじゃれ合いと思ってるようだ

TEN
CIN

けど、タクヤ達は、ええと、もっと凄いの狙ってるぞ？気をつけろよ」
潤矢の奥歯に物が挟まる言い方に、夏輝は悪戯がバレた悪ガキのようにニカっと笑う。
「それ、俺の尻にチンチン挿れたいって事っすよね？俺は確かにお子ちゃまだけど、この寮に三か月も居ればもう全部知ってますよ～！」
夏輝はさらに悪戯っぽくニヤッと笑うと、少し声を落として続ける。
「俺が生まれて初めて見たセックス動画は、潤矢先輩とカケル先輩がこのホールの真ん中でやった公開セックスっす！最高にエロかった！」
まさかの告白に潤矢はさすがに一瞬だけ絶句してから苦笑する。
半年以上前のクリスマスの夜に、百人以上の寮生に見守られながら、今も大切なパートナーであり寮の同じ部屋で一緒に暮らしている一学年先輩の篠原翔と潤矢が初めてセックスした動画が、新入寮生向けの裏の『教材』として使われているらしいことは聞いていた。
すなわち、この学生寮わかたけ館では、本当の意味での両者の同意があれば性行為は無制限である、ということの見本としてだ。
「…そっか。じゃあナツは大丈夫なんだな？」
目をまっすぐ見つめて問う潤矢に、夏輝は力強く頷く。
「大丈夫っす！タクヤ先輩達には、初キスとアナルバージンは本当に好きになった人に、ってお願いしてあって、それ以外ならガンガン俺のこと気持ちよくしてくださいって言ってます！」
楽しそうに、実は酷い事を言う夏輝に潤矢は思わず呟く
「あれ？なんだか急にタクヤ達が可哀そうになってきたぞ？」
潤矢と夏輝が話を終えてソファから立ち上がると、いつの間にか、小学校四・五年生くらいの男の子が夏輝の隣に立っていた。
「…っえ？」
驚いた夏輝がよく見ると、少年は古めかしい着物に『ちゃんちゃんこ』という時代錯誤な服装をしていて、しかも草履履きだった。
「…えっと…あれ？マジで？ひょっとして噂の『タケボウ』かい？」
夏輝が戸惑いながらも、なんとか笑顔で男の子に声をかけてみると、男の子は満面の笑顔を返しながら、とんでもない事を言い出した。
「なってる、おちんちん見せて！」
「…え？」
「なってる、おちんちん、見せて！あと、おっぱいとおへそも！」
意味を理解した夏輝が絶句して固まっていると、男の子の満面の笑顔が見る見る崩れて泣きそうな顔になる。
「…だめなの？」
「えっ？いや…その、」
泣きそうな男の子を見て、夏輝は焦った。そしてすぐに決断する。
「よしっ！いいぜ！ほら！」
夏輝は、一気にジャージのパンツを下着ごと下ろして半剥けの勃起チンポを丸出しにして見せ、さらにTシャツも捲りあげて、潤矢に比べればまだ薄いが形の良い大胸筋と綺麗に割れた腹筋を見せてやった。
大勢の寮生が寛いでいるホールでほぼ全裸を晒した夏輝の見事な肉体の全身を、男の子は嬉しそうに時間をかけて見ると、再び夏輝の顔を見て物欲しそうな顔でおねだりする。
「ねえ、なってる、おちんちん、さわっていい？」
「おう！好きにしな！」
夏輝はニカっと笑って即答する。
男の子は嬉しそうに右手の人差し指で夏輝の剥き出しの亀頭をツンツンと突いて弾力を楽しみ、それから右手で勃起ペニスを、左手で金玉を握って形や大きさ重さを確かめるように揉んだ。
「ああン！」
思わず声が出た夏輝を、いつの間にか取り囲んで見ていた大勢の寮生たちが笑い、黙って見ていた潤矢も男の子の頭を撫でながら笑った。
「竹坊、ナツのチンポ気に入ったのか？」

TEN

「うん！だいすき！」
潤矢に頭を撫でられながら『竹坊』と呼ばれた男の子は、夏輝のペニスと金玉を揉み続けながら満面の笑顔で答える。
「そうか、さすが竹坊だな。ナツのチンポは今年の新入生の中では、形も大きさも断トツの一番だからな」
潤矢の言葉に、夏輝はいまさら首まで真っ赤になって照れ、竹坊は得意げに頷いてから夏輝のチンポを手放した。
「なってる、ありがとう！すごくいいおちんちんだね！」

「じゃあ、やっぱりこの子があの『竹坊』！ホントにいたんだ！」
ホールのテーブルに潤矢と並んで座り、潤矢に買ってもらったアイスを美味しそうに食べる竹坊を見て夏輝は少し興奮気味だ。
「ああ、この『わかたけ館』の、そしてオレ達寮生全員の守り神だ」
そう言って、潤矢は『守り神』の頭をポンポンと叩く。

学校関係にはよくある『七不思議』のひとつで、いわゆる『座敷わらし』のような話なのだが、わかたけ館内で気に入った寮生の前に現れて、チンポを見せろと『おねだり』する男の子『竹坊』の物語は、わかたけ館の寮生に代々語り継がれ、寮生の全員が知っている話だ。
おねだりに応えてチンポを見せると、その寮生には幸運が訪れ、逆に寮生から『おねだり』をすると、どんな事でも叶えてくれるが、その代償として五日間、毎日一つ竹坊の『おねだり』を叶えなくてはならず、しかもそれは『生まれてきたことを後悔する』くらい過酷で、一つでも失敗すると叶えられた願いは取り消されて、失敗した寮生は即死するという。そのため、実際には竹坊に『おねだり』した寮生はまだいない、というのがオチだ。
「でも、潤矢先輩はやったんですよね？」
「ああ、だからホントはもう筋書き変えないとな」

潤矢は苦笑しながら夏輝のスマホの画面をのぞき込む。
その画面の中では潤矢自身が全裸で過酷な性的拷問を受けていた。
「じゃあやっぱりコレも本当なんだ。ガス爆発で寮生全員が助からないところを、潤矢先輩が竹坊に『おねだり』して救って、そのかわりに五日間酷い性的拷問を受けまくったって話！マジでヒーローっすね」
夏輝はスマホと目の前の潤矢と竹坊を交互に見て生唾を飲み込む。
「竹坊が選んだのがたまたまオレだっただけさ。大した事じゃないよ」
潤矢自身はそう言うが、高等部も含めた先輩寮生たちが潤矢に一目以上置いているのは夏輝の目にも明らかで…。
「で、結局、竹坊の正体って？」
「わからん！」
潤矢はそう言って笑うと、この半年で判ったことを簡単に説明する。
竹坊は神出鬼没だが現れた時は実体（肉体）があり、今はアイスを喜んで食べているが、実際には食事は不要で、エネルギー源は十代の男子が射精時に放出するエネルギーらしい。
「だから、毎日の三百人近くの若い男がオナニーをしたりセックスしているこの寮は最高の環境なわけだ」
その代わり、全ての寮生が確かに竹坊の加護を受けているという。
「それはそのうち判るよ。本当は、オレを拷問することで宿願を果たしたから、もうこの寮への地縛は解けているけど、竹坊はこの寮と寮生を好きで、寮生も竹坊を自然に受け入れている。それだけさ」
そう言いながら、潤矢は優しい笑顔で竹坊の頭をなでる。
「食い終わったか？じゃあそろそろ始めるか。ナツ、もう一つ竹坊の『ごちそう』があるんだ。なんだかわかるか？」
「え？いえ。なんすか？」
「若い男の性的拷問さ」
言葉の意味がすぐには飲み込めない夏輝が絶句している前で、潤矢はあっという間に全裸になって、ホールの真ん中に進み出た。

非常口
EXIT

「昨日は凄かったなぁ」
夏輝は眠そうな目をこすりながら、朝飯を食いに『わかたけ館』三階にある自室を出てホールに向かう。
廊下の突き当りはホールの吹き抜けになっていて、既に大勢の寮生達の賑わいが伝わってくる。
今日から夏休みだが、部活等でかなりの人数が残っているらしい。
「…やっぱりホントだよなあ」
吹き抜けの横にある、ホールに降りるための階段に向かって歩きながら、夏輝はスマホの画面を見て生唾を飲み込む。
昨日はついに噂の『竹坊』に会えたばかりか、自分のチンポが竹坊に気に入られて、さらにその秘密（でもないらしいが）を知った。
しかし本当に強烈だったのは『竹坊に力を与える儀式』としてホールの真ん中で、公開で行われた潤矢の性的拷問ショーだった。
男子学生寮のわかたけ館で中等部と高等部の両方を合わせて一番のイケメン寮生が選ばれる『わかたけ息子』の称号を持つ中等部三年生の池澤潤矢が、全裸で両手を吊り上げられたまま、完全勃起させたペニスと金玉を小さな男の子（竹坊）に鞭でめった打ちにされて悶絶するのを目の前で、生で見た夏輝はその場で射精してしまっていた。
「やべえ、また勃ってきた。潤矢先輩エロすぎ。」
聞けば、竹坊の生い立ちに関係する理由で、少年の肉体が性的拷問される際の生体エネルギーが一番『竹坊』が喜び、実際に力を与えるそうで、定期的にほぼ潤矢が肉体を差し出しているらしい。
その過去の拷問動画も他の先輩から一通り貰って見てしまい、結局、昨晩は興奮しすぎもあって寝不足だった。
「っ痛ぁ！…あっ！」
寝不足でボケボケの夏輝は、ながらスマホで潤矢のエロ動画に気を取られてそのまま吹き抜けの手摺に激突した。
その衝撃でスマホを取り落とし、とっさにスマホを追ってしまう。
「あっ！」
気づいた時には、夏輝の体は手摺を超えてしまい、一階のホールに向けて真っ逆さまに落下していた！
「っひ！」
恐怖に声も出せずに固まった夏輝は、次の瞬間には周囲の景色が停止して見えていよいよ覚悟を決める。
「これって走馬灯ってやつ？もうだめだぁ～！あれ？」
しかし、走馬灯のはずの景色の中で潤矢は大きく安堵の表情を見せ、他の寮生達も驚きと安堵、そして苦笑を見せている。
「あっ、あ、俺、ええぇ？浮いてる！」
夏輝はホールの床から一メートル半ほどの高さで、逆さまになったまま浮いて停止していた。ジャージの短パンは下着ごと脱げ、チンポと尻が丸出しだったが、スマホとスリッパまでふわふわ浮いていた。
「さっそく竹坊のご加護を実感できたな、ナツ」
潤矢の言葉に、いつの間にか現れた竹坊が助けてくれた事に気づいた夏輝は、一気に安堵して涙目になり全身の緊張を解いた。
「あっ！こいつ小便漏らしたぞ」
「えっ！」
寮生の誰かの言葉に夏輝自身が驚いたが、確かに逆さまに浮いて床を向いている半剥け萎えペニスの先から、しゃ～っと漏れていた。
「うあああああっ！」
落下した時より大きな夏輝の悲鳴に、ホール中の寮生達が爆笑する。
「やっぱりあの手摺は低すぎるな。昔から指摘のあった案件なんだ」
「キリン先輩！昨日から交流会の下見に行ってるはずじゃ？」
驚く潤矢に、寮長で高等部三年の倉敷貴倫は肩を竦めた。
「行ってきたさ。それでＯＢ側の要望に対応するため舞い戻ったんだ」
寮長は、夏休み恒例の行事の打ち合わせで不在の予定だった。

ON
TAKE

「深い場所もあるからな、足元に気をつけろよ！」
キリンこと寮長の倉敷貴倫の言葉に、生返事を返して潤矢と夏輝を含む水着姿の寮生達八人が歓声をあげて川に入っていく。
夏輝のお漏らし事件から三日後の週末、学校法人竹鋸学園が管理する山にある合宿施設で開かれている竹鋸学園運動部ＯＢ会と現役学生の交流会に参加している学生達で、交流会最初の行事として施設の傍に流れる川の河原で開かれているバーベキューパーティーの用意をする間に、学生達だけ川遊びを許されたのだ。
潤矢は明らかにワンサイズ小さい青色のビキニで、夏輝は赤いサーフパンツだが布が薄く、他の少年達の水着もタイプは様々だが似たような状態で、さらに全員インナーが無いので水に濡れるとチンポの形や尻の形がくっきりと浮かび上がった。
水着は、交流会の運営者でもある寮長のキリンが用意したものだ。
「なるほどね！こういう事っすか」
夏輝は自分の股間と潤矢の股間を見て、さらにそんな自分達を見てご満悦な三十人近いＯＢ達を見て笑った。
「そういう事。説明した通り『交流会』の実態は現役運動部員の鍛えられた肉体を玩具にした有力ＯＢの接待なんだ。だから学生の参加者は運動部員で、さらには、わかたけ館から選ばれている。夜には凄く恥ずかしいこともさせられるぜ？本当に来てよかったのか？」
心配そうに言う潤矢に夏輝は笑顔で頷く。
「ＯＢの要望で新入生も必要になったんでしょ？スゴイ金額のお小遣いは魅力っす！…それに俺、もういくら恥かいても同じだし！」
そう言って口をとがらせる夏輝の頭を、潤矢はポンポンと叩いた。
「ねえねえ！これとれた！」
白いふんどし姿の竹坊が両手で掴んだ黒くて細長い黒光りする生き物を見て、潤矢と夏輝は仰天する。
「うなぎ！マジで？」
「いや、竹坊のことだからアリだな…」
夏輝の疑問に潤矢は苦笑しながら答える。今回はなぜか竹坊が一緒に付いてきて、ごく自然に参加してしまっているのだ。
「このぬるぬるしたの、おちんちんみたいだね！じゅんやとなつてるの、おしりのなかにいれてい～い？」
竹坊の無邪気な一言に夏輝は焦って尻を隠し、潤矢も唖然とする。
「うふふっ！う～そ～！」
二人の様子を見て竹坊はきゃっきゃと楽しそうに笑った。
「そろそろバーベキュー始めるぞ！『必ず水着の水気をよく取れよ』」
キリンの掛け声に学生達はお互いに探るような目配せをし合った。
不自然な一言は事前に命令されていた行動の合図だった。
「面倒なんで脱いじゃっていいすか？」
潤矢はそう言ってビキニを下して尻を丸出しにする。
「じゃあ俺も！」
夏輝もサーフパンツに手をかけて下してチンポを出す。
「ぼくも～！」
竹坊も楽しそうにふんどしを解く。
そんな潤矢達を見て、他の学生達も腹をくくって全裸になっていく。
もちろん実際は先輩命令なのだが、自主的な悪ノリを装うのだ。
「これも、やいちゃおうよ！」
竹坊は羞恥で勃起してしまった夏輝のペニスを割りばしでつまむ。
「いいね！焼いちゃえ！」
「いやいやいや！潤矢先輩までヒドイっすよ！」
イケメンスポーツ少年達が全裸で参加した河原のバーベキューは大いに盛り上がり、ＯＢ達は大喜びで一層の支援を約束してくれた。

「お待たせしましたっ！竹鋸学園運動部ＯＢ会のみなさんと我々現役学生との交流会夜の部、始めさせていただきます！」
キリンの手慣れた感じの挨拶に、ＯＢ達からは盛大な拍手が沸き上がる。キリンは昼間のバーベキューパーティーの際のＴシャツにジャージというラフな衣装から、ポロシャツにスラックスに着替えていた。
会場は合宿施設の食堂と大きなウッドデッキの間のガラス戸を取り除いた空間で、実際は半分が屋内ながらも、気持ちの良い夜気が満ちた、屋外での開放的なパーティー会場の雰囲気だ。

「日頃の多大なご支援に感謝し、さらにもっともっと多大なご支援を期待して！加えて、今回も実際は参加者全員わかたけ館の寮生ですので、わかたけ館へのさらなるご支援も期待して！恒例のサプライズ企画は超ビックなプレゼントをご用意しました！」
キリンの大仰であざといアナウンスに合わせて会場の照明が落ち、薄暗い中を赤いリボンがかかった二メートル四方はある巨大な箱が四人がかりで運ばれてきて、会場中央に用意されたスペースに置かれた。
「それでは皆さんでカウントダウンしてください！よろしいですか？三っ、二ィ、一っ！ゼロっ！」
ゼロの掛け声と同時に箱が開いて紙吹雪が舞い、ほぼ全裸の少年二人がスポットライトに照らし出された！
付け襟と蝶ネクタイにカフス、メッシュのベスト、そして卑猥なマイクロビキニだけを身に着けた潤矢と夏輝が、飲み物とフードを載せたトレーを持ってポーズを決めていた。
潤矢は完璧な笑顔で膝立ちして左手を腰にあててカクテルとドライフード持っていて、チンポの形がくっきり出ている薄い布のシングルサイドビキニは、多くはないがストレートで艶やかな陰毛がほぼ丸出しになり、胸元の大きく開いた荒いメッシュのベストは胸までしかなく、形の良い大胸筋ときれいなピンク色のぷっちり勃った乳首、そしてきれいに割れたシックスパックの腹筋から下腹と陰毛までの見事な造形が、卑猥に強調されている。
夏輝は緊張を隠せない硬い表情で気持ちジョジョ立ちで直立し、熱々のお茶とおにぎりを持っているが、両サイドが細い紐のマイクロビキニは、やはり薄い布越しにチンポの形は丸出しだった。
潤矢と同じ荒いメッシュのベストの下では、潤矢よりは薄い筋肉ながら形の良い大胸筋と薄いピンク色の尖った小さい乳首が褐色の肌に綺麗に映えていて、薄いながらもしっかりシックスパックに割れた腹筋からパイパンの下腹までの艶やかで滑らかな腹部はライトに照らし出されて彫刻のように綺麗だ。
ＯＢ達は全員が一瞬息を飲んでから大きな歓声をあげる。
「ありがとうございます！これで受けなかったら後が辛すぎるので！コンセプトは男の子バニーなんですが、耳までつけるとギャグっぽくなるので止めました。昼間に真っ裸を見てても、意外と滾るでしょ？」
茶目っ気たっぷりのキリンの口上にＯＢ達は拍手で応える。
「もちろん、二人だけじゃありませんよ！」
キリンが手を挙げると会場の照明が灯り、会場にいた体操着姿の残りの少年達六人がその場で体操着を脱ぎ捨て、潤矢や夏輝と同じような衣装に早変わりして見せた。
中等部二年から高等部二年まで部活や年齢はバラバラで、表情も硬めだったり照れていたり、悪戯小僧のように楽しそうだったりしているが、全員が鍛えられた見事な肉体のイケメンスポーツ少年だ。
「それでは、今更ではありますがメンバー紹介をさせていただきます」
スポットライトが改めて潤矢に当たる。
「まずは、我が学生寮わかたけ館執行部調べで、弟にしたい後輩、恋人になりたい、全裸に剥きたい、セックスしたい、乳首舐めたい、チンポをしゃぶりたい、尻を犯したい、各一位！なのは本当ですが、公式には竹鋸学園新聞部主催の竹鋸学園ミスターコンテスト「竹鋸息子」

茶

三年連続第一位！そして、わかたけ館で一番イケメンでエロい体な男に与えられる、我々わかたけ館のセックスシンボル『わかたけ息子』の称号を持つ男、中等部三年生ラグビー部の池澤潤矢です！」

エグい紹介をされた潤矢だが、極上の笑顔を絶やさず頭を下げてから苦笑気味に自己紹介する。

「竹鋸学園中等部三年、ラグビー部の池澤潤矢っす！なにかイロイロとヒドイ紹介をされましたが、残念ながら全部本当です。ご存じの通り『竹鋸息子』も『わかたけ息子』もちょっと言えないお役目がいっぱいありますので、要するにオレの身体は、特にチンポは、竹鋸学園の、そして学生寮わかたけ館の寮生全員の共有のオモチャです。今日明日はＯＢの皆さんのオモチャですので、思う存分使ってください！って言えって言われました！」

ドっと会場が沸くなか、潤矢はニヤリと笑ってさらに畳みかける。

「あと、オナニーの回数も言えって言われてますが、そういう訳もあるので射精の回数を告白します。毎日、一日も休まず最低三回以上は射精してます。金玉の性能には自信があります」

盛大な歓声と拍手に応えて潤矢は再び深く頭を下げた。

次にスポットライトが当てられた夏輝はあからさまに目が泳いでいるが、必死におすまし顔をしているのが妙に可愛くて歓声を浴びる。

「次は、初参加でこの春の新入生です！六か月前までＤＳですよ。信じられませんね。わかたけ館の新入寮生では断トツで一番のチンポを持つ男として将来性抜群の中等部一年生ラグビー部の結城夏輝です！ナツキじゃなくてナツテルです！可愛がってやってください！」

夏輝は首まで真っ赤になりながらペコリと頭を下げる。

「竹鋸学園中等部一年、ラグビー部の結城夏輝っす！…潤矢先輩がめっちゃ受けた後では何をしゃべっていいかわかりません！先輩、ヒドイっす！まだ生まれて十三年なのでこんなピンチの切り抜け方はわからないです。え～っとオナニーは毎日一回か二回です。……え？今、潤矢先輩が困ったらチンチン出しとけって言ったので出します」

夏輝はビキニを下ろしてチンポを出して頭を下げた。

会場は再び良い感じに沸き上がった。

キリンが裸体に卑猥な衣装を着けたスポーツ少年達の氏名や個人情報を順番に紹介している間に、潤矢達が入っていた巨大な箱が片付けられてテーブルや椅子がセットされていく。

八人全員の紹介が終わる頃にはＯＢ達も改めて席についてオードブル等も一通りテーブルの上に並んでいた。

「それでは、お時間までじっくりと、竹鋸学園運動部員として日頃の練習で鍛え上げた少年達の肉体をお楽しみください！」

ＯＢ達の大きな拍手に迎えられて潤矢達八人の少年は、まずはオーダーを取りに各テーブルに散った。

「おまたせしました！タピオカミルクティーです」

そう言って夏輝がグラスをテーブルに置くと、ＯＢの男性は一万円札を右手で夏輝のビキニパンツの紐に差し込む。

そして、その手で夏輝の尻を揉みながら左手で金玉を優しく触った

「ああン！ありがとうございます！」

夏輝のビキニには既に五枚以上の一万円札が挟まっていて、半剥けペニスは完全勃起してビキニの薄い布を目いっぱい押し上げている。

最初のオーダー取りの際から、全ての少年達はテーブルに出向くたびに高額のチップと引き換えに肉体を触られまくっている。

先輩からの命令は『どんな注文も受け入れてお礼を言うこと』だ。

「ねえ、ナツテル君。ミルクを追加したいんだけど、このミルクタンクのミルクを出してもらっていいかな？自分で『操作』するからさ」

そう言いながら、ＯＢの男性は夏輝の金玉をビキニの上から再びポンポンと優しく持ち上げた。

「あっ、はい！もちろんどうぞ！俺のチンポで良ければいくらでも使ってください！」
ＯＢの男性は満足げに頷くと五万円を夏輝の尻の紐に挟み、そのままビキニを下ろして既に完全勃起している夏輝のペニスを出す。
ポンっと飛び出した半剥けの完全勃起したペニスの先では、透明な粘液がすぐに溢れ出して綺麗なピンク色の亀頭がテカテカ光り、半剥けの皮の縁から粘液が零れ落ちそうになった。
「ああン！…やっぱり大人の手はデカくてあったかいっす！」
ＯＢの男性が夏輝の勃起ペニスを優しく掴むと、夏輝は快感を隠すことなく嬌声を上げ、切なげに男性の手のぬくもりの感想を言う。
ＯＢの男性は感激した様子でさらに二万円追加してから、ゆっくりと丁寧に夏輝のペニスを扱き始める。
「さすが、新入生で一番のおちんちんだね。大きさも形も、そして硬さや弾力、手触りまで、最高のペニスだよ。金玉も重量感があるいい玉だし、本当に将来衆望だね！」
本気で感心した様子のＯＢの男性の言葉に、夏輝はさらに顔を赤らめながら言葉を絞り出すように懇願する。
「あ、ありがとうございます！でも、もっと乱暴にして欲しいっす！その方が俺っ…！」
そこまで言って首まで真っ赤になる夏輝を見て、ＯＢの男性は生唾を飲んでから、ガシガシと激しく夏輝のペニスを扱き始める。
同時に、ＯＢの男性の同席者が夏輝のアナルに指を入れた。
「あああっ！はあああンっ！」
夏輝は抑えることなく嬌声を上げて呼吸を荒くしていく。
「…ああっ、もう出るゥ！」
切羽詰まった声音の夏輝の悲鳴と同時に、夏輝の完全勃起したペニスの尿道口から濃い白色のザーメンが噴出して弧を描き、ＯＢの男性のタピオカミルクティーのグラスに飛び込んだ。

「おっ！ナツのやつマジで一発で入れた！」
夏輝の奇跡的なワンショットを偶然見た潤矢は素直に驚いた。
しかし可愛い後輩をイジってやる暇は残念ながら無いようだ。
「ジュンヤ君！こっちにも来てよ」
「そうそうお願いだからさぁ～」
興奮した様子のＯＢの男性二人に腕を掴まれた潤矢は、嫌な顔一つせずに極上の愛らしい笑顔で上手くあしらう。
「ありがとうございます！今すぐお伺いいたしますので」
下げる途中だったグラスと皿を手早く片付けると、胸やビキニに挟まった大量の一万円札を取ってバックヤードスタッフに預ける。
潤矢はシングルサイドビキニなのですぐに限界まで札が貯まるのだ。

「おまたせしました。ご指名ありがとうございます」
潤矢がテーブルに出向くと、さっそく二人のＯＢ男性から十万円づつ差し込まれてしまう。
「やっと来てくれたね。ジュンヤ君は大人気だから昼間のバーベキューの時も結局声がかけられなくて」
「そうそう、でもやっぱり最高の身体だね！コレ、もう芸術品じゃん」
そう言いながら、ＯＢの男性の一人はシングルサイドビキニの中で完全勃起して文字通り肉棒と化している潤矢のペニスを愛おしそうにゆっくりと撫でていく。
「ねえ、ジュンヤ君、おれら二人で隅々まで体を触らせてもらっていいかい？それとできれば射精する動画も撮らせてほしいんだ」
さらに札束を握りしめて言うＯＢの男性達に潤矢は明るく答える。
「もちろん良いですよ！写真や動画はオレ以外の男の子には無理強いしないで欲しいですけど、オレは全然大丈夫です」
拍子抜けした様子のＯＢの男性は、思い切ってさらに言い募る。
「あ、じゃあ、その、お尻の穴も撮らせてほしいんだけど！」

「いいですよ」
さすがに苦笑気味ではあるが潤矢は快諾する。
「じゃあ、まずはコレからどうぞ」
潤矢は自身のシングルサイドビキニから完全勃起したズル向けペニスと金玉を取り出してＯＢの男性達に差し出した。
「実は、今日はまだ一回も射精してないので結構濃いのが出せますよ」
そう言ってＯＢの男性達を喜ばせた潤矢は、視界の隅の竹坊に気づいて驚く。いつもとは違い、涼しげな浴衣姿の竹坊は夏輝や潤矢、そしてその他の少年達がＯＢの男性達に肉体を差し出してオモチャにさせて頑張っている様子を嬉しそうに見て回っているようだ。
そしてどうやらＯＢの男性達にも竹坊は見えているが、なぜか存在を気にするような気にならないのが、竹坊の能力らしい。
「…オレのチンポ、扱いてくれますか？」
まずは学校のため、わかたけ館のために体を捧げよう、そう潤矢は思い直して竹坊のことはひとまず忘れることにする。

「皆さんお楽しみいただけていますでしょうか？そろそろ夜の部最後の出し物のお時間になります。学生達は下がって準備をしてください」
約二時間の狂宴の後、運営者であるキリンはそう言って場を閉めると、潤矢達を下がらせて会場のセッティングを再び調整させる。
その待ち時間はキリン自らが高校生とは思えない話術でＯＢ男性達を楽しませて時間稼ぎをしたが、そのタネに先日の公開おもらし事件を使われた夏輝は、バックヤードで潤矢達が爆笑する中で竹坊だけが可哀そうにと頭を撫でてくれた。
「竹坊～！もう俺にはお前だけだよ！」
「はいはい、そろそろ出番だぞ！」
潤矢の容赦ない掛け声に、夏輝はため息をついてから気合を入れた。

「お待たせしました。交流会夜の部、最後は竹鋸学園、そして学生寮わかたけ館のセックスシンボルとして、竹鋸学園で一番エロい肉体を持つイケメンの中等部三年生、池澤潤矢の輪姦ショーです」
内容の割に静かに告げるキリンの声音が、かえって背徳感を大幅に増していて、それまでの体育会系とは違う淫らな雰囲気を醸し出す。
そして、キリンが静かに手を上げると、ウッドデッキに張られていた幕が落とされて、現れた光景にＯＢ男性達は歓声を上げた。
幕の向こう側には、小さな丸い舞台とその上に載せられた丸いテーブルがあり、その上に蝶ネクタイと開いたベスト、そして片方の靴だけ履いた潤矢がＭ字開脚で両膝のベルトと鎖で吊るされていた。
その潤矢を、テーブルと潤矢の間に入って全裸の夏輝が支えていて、さらに二人の全裸の少年が潤矢に完全勃起したペニスを突き出して銜えさせたり扱かせたりしているのだ。
潤矢の目鼻立ちの整った顔と手足の長い均整の取れた肢体、あるいは鍛え抜かれた形の良い筋肉が覆った彫刻のような美しい肉体が、澄んだ夜気に包まれたウッドデッキで明かりに照らし出され、その股間では、柔らかな陰毛と標準以上のサイズで形の良いズル剥けの完全勃起したペニスと淫嚢がゆったりと揺れていた。
「まず最初に、中等部一年生の結城夏輝が、生まれて初めてペニスを男のアナルに挿入して射精する場面を皆さんに御覧いただきます」
「潤矢先輩っ！」
「ああ、いいぜ来いよ！」
夏輝の半剥けペニスが潤矢のアナルに一気に挿入されて、次の瞬間にはあっという間に射精してしまう。
「ああっ、…ああン！」
「ナツっ！そのまま抜かずにもう一発だ！」
潤矢はそう命令すると、以後はケダモノになった七人の少年に体を投げ与えて、七人合計二十一発の精液を上下の口で飲み込んだ。

「じゅんや、すごくがんばったね」
竹坊はそう言いながら潤矢の頭をなでなでしてくれた。
竹鋸学園運動部員による潤矢の輪姦ショーがOB男性達の大興奮のうちに幕を閉じた直後、丸いテーブルに大の字になった潤矢は七人の少年に二回ずつ犯されたアナルから大量のザーメンを噴出し、陰毛まで精液で濡れている萎えたズル向けチンポや、腹筋と大胸筋を中心に主に自分自身のザーメンで濡れた卑猥な肉体、そして涙とザーメンで汚れた顔を写真や動画に撮られまくっていた。
夏輝などはすぐにバックヤードに連れて行こうしたが、潤矢自身が止めて自らの痴態をOB男性達に晒して撮影させていた。
「輪姦ショーは精液まみれの肉便器を晒すところまでがワンセットだ」
潤矢は小声で夏輝にそう告げて笑ったのだ。
わかたけ息子として求められる役割を寮の皆のために受け入れて、その任務を完璧に果たすために自分の肉体を潔く差し出している潤矢だからこそ、高等部の先輩も含めてすべての寮生が潤矢を認めているということを、夏輝はようやく理解できた。
そして、竹坊も、きっとそうだと思った。

潤矢の過酷な役目も終わり、潤矢も含めて少年達全員がバックヤードに下がった直後、それは起こった。
「…なにこれ！いやあ！」
竹坊の悲鳴に驚いた潤矢と夏輝が半裸のまま飛び出すと、ウッドデッキの丸いテーブルの上で竹坊は浴衣を大きくはだけ、可愛いおちんちんをプルプルと揺らしながら泣いていた。
そしてその首には、いつのまにか見たことがない色ガラスのような素材の首輪が装着されて怪しい光を放っている。
しかし、何より潤矢と夏輝を驚かせたのはその竹坊を背後から腕を掴んで拘束している人間の正体だった。

「キリン先輩？」
竹坊を拘束しているのは、学生寮わかたけ館の寮長で竹鋸学園高等部三年生の倉敷貴倫だった！
「先輩！どうしてそんな！」
駆け寄ろうとした潤矢の身体が見えない何かに弾かれる！
「つな？」
訳が分からず目を白黒させている潤矢の隣では、同じように弾かれたらしい夏輝が尻もちをつきながら目をむいて絶句していた。
「ナツ？」
潤矢も夏輝の視線の先を見て愕然とする。
「…なんだこれ」
自分たちの先輩で、普通の高等部の三年生であるはずの倉敷貴倫の背後から漫画やアニメでいう『オーラ』としか言いようのない光のエネルギーが迸っていた。
しかし、そこで潤矢は昨年のクリスマスのことを思い出す。あの時、ガス爆発から寮を救った竹坊の身体から迸った光の渦と同じ色だ。
「そんな、なぜキリン先輩が…」
ますます謎が深まって混乱する潤矢の目の前で、キリンからさらに強い光が何本も迸り、まるで触手のように竹坊にまとわりつき始める。
竹坊の両手首と両足首、そして可愛い包茎おちんちんに光の触手が何重にも巻き付いていく。
「やあっだああ！」
竹坊は泣きながら身もだえしているが、その声がどんどん小さく弱くなっていくのと反比例して、キリンの放つオーラの光が強くなっていき、光の触手も太く強くなっていく。
「竹坊っ！」
潤矢の呼びかけに気づいた竹坊は必死に何かを訴えるが、既に声は聞こえないほど小さくて、そのまますぐに竹坊は意識を失った。

Giraffe

「皆さんお騒がせしてすいません。本日予定されていた行事はすべて終了していますが、ちょっとした余興をご披露させていただきます」
意識を失った竹坊をお姫様だっこしながら、キリンは爽やかに笑う。
潤矢達が見た超常現象は当然ＯＢ男性達も見ているが、このキリンの『余興』という一言で納得してしまう。
潤矢自身が思ったように、あまりにアニメっぽいビジュアルだったので、かえって特殊効果などの仕掛けという想像を勝手にして疑問を自己解決してしまったのだ。
しかし、竹坊と直接触れ合っている潤矢と夏輝にはそのごまかしは通用しない。
体が動くようになってすぐに駆け寄った潤矢と夏輝に、キリンは機先を制して耳打ちする。
「竹坊を消滅させたくなければ、黙って見ていろ」
「っそんな…」
あまりに強烈な一言に、潤矢と夏輝は身動きが取れなくなる。
「それでは皆さん、ちょっとした余興の続きをお楽しみください」
キリンが再び丸い舞台に上がると先程と同じオーラが迸り、キリンの前にオーラで形作られた三角木馬が現れた。
そして、その三角木馬の上に、気を失ったままの竹坊が光の触手に両手と両足を拘束されたまま持ち上げられていく。
竹坊の股間では、なぜかいつの間にか完全勃起した包茎おちんちんがプラプラと揺れている。
「さあ、目を覚ましてもらおうか」
気を失ったままの竹坊の股間が三角木馬の背に落とされる。
「あああああっ！」
覚醒した竹坊の悲鳴と同時に光の触手がさらに増えて強力になり、竹坊の勃起した包茎ペニスと薄くて小さい乳首に巻き付いて、どんどん光を増して鋭角になる木馬とともに強力に苛んでいく。
竹坊が苦しめば苦しむほど光は強くなり、さらに竹坊は苦しむという残酷なサイクルが加速度的に進んでいく。
その様子をキリンは冷たい笑みを浮かべて満足そうに見ていた。
「キリン先輩！なんでこんなことを！」
あまりの急展開に思考停止に陥っていた潤矢と夏輝が、我に返ってキリンに詰め寄ると、キリンは意外なほど親しげに問いかけてくる。
「潤矢、竹坊の『力』を自分達のモノにしたくないか？」
「そんな事ができるわけないじゃないですか！」
「できる。この首輪があれば可能だ」
そう言って、竹坊の首についた色ガラスの首輪を指さした。
「これは、わかたけ館の寮長に代々伝わる物で、大昔に寮の大先輩が竹坊を『飼いならす』ために生み出した呪具なんだ。これを上手く使えば竹坊を思い通りに操れる。潤矢、そして夏輝、俺の仲間になれ！そして竹坊の力を有意義に使うんだ！」
「お断ります！」
「俺も！」
潤矢と夏輝は即答する。
「竹坊は、わかたけ館の大切な仲間だ！『飼いならす』とか『操る』とか、ふざけんな！絶対許さないぞ！」
潤矢は怒りを露わにしてキリンを睨みつけ、夏輝も力強く頷いた。
「…そうか、残念だ」
意外なほど穏やかに、そして本気で残念そうな表情を見せたキリンは、しかし次の瞬間には邪悪な表情で二人に牙を剥いた。
「だが、やはり協力はして貰うぞ。見ての通りこの首輪は竹坊のエネルギーを吸い取っている。代わりに強力なエネルギーを注入しないと竹坊は消えてなくなる事になる。性的拷問というエネルギーをな！」

「皆さんに素敵なお知らせです。ちょっとした余興にさらに追加があります！われらがセックスシンボル、中学部三年ラグビー部で、かつて『美少年すぎるラガーマン』とネットで話題になった池澤潤矢と、わかたけ館とラグビー部期待のルーキー結城夏輝が、皆さんのために超ハード！ＮＧ無しの性的拷問ショーを披露します！」

会場のＯＢ男性達から歓喜のどよめきが沸き起こった。

ＯＢ男性達の多くは潤矢の輪姦ショーが終わって潤矢の精液塗れの肉体を撮影しまくった後は自室に戻っていたが、キリンが始めた『余興』の話を聞きつけてほとんどが会場に戻ってきていたのだ。

「さすがに殺しはしない。だが死んだ方がマシだと確実に思うくらいには地獄を見てもらうぞ」

キリンは、全裸に革の首輪と革のハーネスを着けさせ、両手両足を革の拘束具で拘束した潤矢を鎖で吊り上げながら耳打ちする。

「日付が変わるまであと三時間、とりあえず今回はそこまでお前たちが拷問され続ければお前たちの勝ちだ。あの首輪は日付が変わると効力がリセットされてしまうからな。その前にお前たち二人のどちらかでも降参すればエネルギー不足の竹坊はお終いだ」

「…オレはどんな地獄でも喜んで見ます。だがナツは、夏輝はまだ無理だ。あいつも拷問するのはやむを得ないにしても、本当にヤバいやつはオレの身体を使ってください」

潤矢も決意と覚悟に満ちた声でキリンにそう耳打ちする。

「…本当にお前は凄いやつだな」

キリンは皮肉っぽくも感嘆しているようにも聞こえる声音でつぶやくと、吊り上げ終わった潤矢の金玉を掴む。既に革のリングで縊りだされている金玉の重さと形を楽しむように揉みながら告げる。

「じゃあ、素敵な拷問の始まりを宣言しようか」

キリンは、手の中の潤矢の金玉をコリコリと揉み潰した。

「ぎゃあああああっ」

激痛に悶絶する潤矢の悲鳴が開始の合図となって『ちょっとした余興』のイケメン筋肉男子中学生の性的拷問が始まった。

「タピオカとかいう黒くて丸いモノをたくさん入れるのが流行ってるようですので、男の子にも目いっぱい入れてみましょう！」

そう言って笑いながら、キリンは潤矢のアナルにかなり大きめの黒いアナルビーズを次々と押し挿れていく。

「っんあぁ！」

腹に押し込まれていく異物感に潤矢は呼吸を荒くしていく。

「十一個、まあ入ったほうですかね。実はコレ超高級品で、リモコン操作で腹の中でボコボコ動くんですよ」

スイッチの電子音がした瞬間、アナルビーズが潤矢の直腸内で大きく振動し始めて、潤矢の腹を中から乱打し始める。

「っひいあああっ！」

耐え難い不快感と苦痛に潤矢は身悶えて鎖を揺らず。

さらに前立腺も乱打されて、ズル向けペニスが一気に完全勃起して無様にぶるんぶるんと振り回される様子にＯＢ男性達は爆笑する。

「いいね！じゃあ次はチンポにも入れようか」

キリンは潤矢の勃起したペニスを掴むと、剥き出しの亀頭を摘まんで尿道口を開かせ、直径五ミリはある金属製のアナルビーズの一つ目を尿道に挿し込んだ

「がああああっ」

そのまま潤矢の尿道には黒い小さな金属球が十五個押し込まれた。

「ドリンクも入れないとね。今回はオイルだ」

キリンは、注射器のような器具で潤矢の尿道にオイルを注入し、さらにアナルにも浣腸器で大量のオイルを注入していく。

「さあ！筋肉男子中学生タピオカオイル入りの完成です！」

「さあ、ＯＢの皆さんに楽しんでもらえ！」
キリンは、言い終わると同時に大きく振りかぶって、潤矢の腹を押し上げるように全力で殴った。
「っぐえええっ」
キリンの拳が潤矢の腹にめり込んだ瞬間、潤矢のアナルと尿道口から黒いアナルビーズとオイルが噴き出すように押し出された。
しかし、全てのアナルビーズが出ることはなく、気絶して項垂れる潤矢のアナルと尿道口からは、オイルでテカテカと光った黒いアナルビーズが垂れ下がっていた。
「筋肉男子中学生タピオカオイル入り、いかがでしたか！好評のようですのでもっとタピオカ大きくしてもう一発やりましょう！」
潤矢は金玉を殴られて強制的に覚醒させられ、さらに一時間以上もアナルと金玉とペニス、そして全身を様々な方法で拷問され続けた。

「筋肉男子中学生は少し飽きましたね。口直しに可愛い新入生、中等部一年生の男の子を拷問してみましょう。夏輝くん、生まれて初めての三角木馬の感想を聞きたいな。素敵な初体験だろ？」
「想像以上に痛くて苦しいっす！マジで真っ二つになりそう！」
泣きながら素直に答える夏輝にＯＢ達は拍手で応える。
消耗が激しい潤矢に代えて拷問の舞台に上げられた夏輝は、木製の四角い柱から横に張り出した三角形の木材に全裸で座らされ、両手両足を革と鎖で柱に拘束されていた。
さらに両膝から鉄球の重りを下げられていて、金玉は左右に縊りだされ、股間には鋭角な木材がめり込んでいる。
「それは良かった。でも本物の三角木馬はこんなもんじゃ無いんだぜ？この重りだって本当はもっと大きいのが必要なんだ」
キリンはそう言いながら夏輝の膝から吊るしている鉄球を両手で持ち上げて、一気に落とした。

「うぎゃああっ！」
股間への衝撃と激痛に夏輝は絶叫するが、キリンはさらに鉄球に自らの体重をかけて押し下げた。
「っんひいいいっ！」
夏輝が絶叫するたびにＯＢ達は盛大な拍手で応えて盛り上がった。

「夏休みといえば、ＯＢの皆さんならコレですかね？」
キリンの手のひらには昆虫のクワガタが乗っている。
そこまで年じゃないよ！というヤジに笑いつつキリンは続けた。
「今どきの子供は存在自体を知らない場合も多いようですからね。今日はいい機会なので、昆虫での遊び方を教えてやろうと思います」
夏輝はいまいち飲み込めてない様子で困惑していたが、キリンの持ったクワガタが自分の右の乳首に近づけられて、ようやく気付く。
「えっ！マジっすか？えええ？痛ったあああ！」
クワガタのハサミが勃起気味の夏輝の右乳首を器用に挟み、想像以上の激痛と不快感に夏輝は身悶えする。
「それでは夏輝君に質問です。その木馬というまな板にのった金玉を木槌で叩き潰すのと、このクワガタで挟むのとどちらが良いですか？」
究極の選択を迫られた夏輝は泣きながら答える。
「…クワガタ」
答えと同時に、ひょい、と夏輝の金玉にクワガタのハサミが当てられて、クワガタのハサミが夏輝の金玉に食い込む
「ぎゃああっ！痛い痛い気持ち悪いいいイ！」
「クワガタは三十匹以上いるからな。全部お前の身体に着けてやる」
夏輝の左右の乳首に左右の金玉、そして剥き出しの亀頭と勃起したペニス、さらに顔を含む全身を大量のクワガタがハサミまくった。
「ひいいいぃいいあああああっイヤぁあ～！」
夏輝の狂ったような絶叫を、ＯＢの爆笑が打ち消していった。

卍卍

「似合っているじゃないかナツ。セクシーなセックス奴隷だぜ」
潤矢の軽口に、夏輝はちょっと口を尖らせる。
「いいんすよ？出オチ芸人みたいで笑えるって言って」
夏輝も潤矢と同じように全裸に革のハーネスと首輪、そして手枷足枷を着けられて、さらに尿道をプラグで塞がれた上でそれを固定するようにコックハーネスを着けられていた。
潤矢は引き続き全裸に同じ革の首輪とハーネス、そしてペニスと金玉の根本を革で縛られていたが、勃起と射精は可能な状態だ。
潤矢と夏輝の二人がそれぞれじっくりと苛烈な拷問で嬲られた後に、今度は二人そろって公開奴隷セックスをすることになったのだが、最初からぶっ通しで見ている観客がタバコ休憩を要求してきたため、思わぬ小休止になっていた。
二人は拷問に使う丸テーブルに腰掛けてのんびりと会話していたが、観客のＯＢの要望で大きく股を開いて卑猥に戒められた肉体を、特にチンポを晒して撮影されまくってもいた。
「でも、マジで潤矢先輩はすっごくセクシーでエロいっす。なんかこのままアラブの石油王にお持ち帰りされちゃいそうっすね」
夏輝は隣に座る潤矢の肉体を舐めるように見てため息をつく。
「…まあ、誘われたことはあるけどな。アラブの金持ちに。マジで」
潤矢の爆弾発言に絶句している夏輝に、潤矢も言葉をかける。
「…ナツの童貞もアナルバージンもオレが貰う事になっちゃったな」
「それは全然オッケーです。むしろラッキーっす」
「…そうか」
何かに気づいた潤矢は優しく笑い、夏輝は勢いに乗って告白する。
「潤矢先輩、俺、先輩のこと好きでした！初恋っす！」
「過去形なんだな」
「だって先輩にもうパートナーがいるのは一番最初に知らされたし！会った瞬間に初恋と失恋同時って、いまどきマンガでも無いっす」
「なんか、このまま聞いていたいというか、ネットで同時配信したいような甘酸っぱい会話だね。ほぼ全裸でチンポ晒したセックス奴隷のコスだけども」
苦笑するキリンの言葉に、夏輝は首まで真っ赤になり、潤矢は声をだして笑った。
「残念だけど時間だよ。今日一番の地獄に落ちてもらおうか」
キリンの手にはエグイ形状と大きさのディルドがあり潤矢は黙ってアナルをキリンに差し出した。
「これは、強力な電撃ディルドでね。安全基準ギリギリの電撃をガンガン打ち込める。そして、夏輝君の尿道に入っているプラグとも連動していて、つまり二人がアナルセックスして繋がると、二人のペニスと金玉を強力な電撃が襲うという仕掛けだ」
酷い事を言いながら、キリンはディルドを潤矢のアナルに挿入する。
「もちろん、夏輝くんはプラグに塞がれて射精はできない。とにかく一切快感は無く、苦痛と激痛しかないセックスをしてもらう」
さすがに泣きそうな夏輝を潤矢は優しく抱きしめて頬にキスをする。
「先輩！」
「最悪の初体験になるけど、最強のネタを手に入れるだけだ。オトコのアナルなんて大したもんじゃない。最初は普通に痛いだけさ」
「…はいっす！」

丸テーブルに手をつき、潤矢に向けて尻を突き出す夏輝の綺麗なピンク色の蕾のようなアナルに、潤矢の完全勃起したズル向けペニスの亀頭がぴったりと押し当てられる。
「ナツ、犯すぜ」
「おっす！」
潤矢の亀頭が一気にカリ首まで夏輝のアナルに埋め込まれ、一呼吸おいてからゆっくりとペニスの根本まで挿入していく。

「ぎゃあああああっ！」
潤矢と夏輝の二人同時に絶叫して固まってしまう。
根元までペニスを挿入した瞬間、潤矢のアナルのディルドと夏輝のペニスの尿道プラグの間に電撃が通ったのだ。
「…っ！ナツ！生まれて初めてのアナルセックス、アナルバージン喪失の感想を聞かせろよ！」
激痛で全身に脂汗を流しながら、不敵に笑った潤矢が観客にも聞こえるように大声で叫ぶ。
「…っはあ、ああっ、痛くてケツの穴とチンポが爆発しそうっす！でも大丈夫！ぶっちゃけ、さっきの虫地獄よりはるかにマシっす！」
夏輝も激痛に喘ぎながらも精いっぱい叫んでさらに不敵に笑う。
「俺らの地獄は竹坊のエネルギーっすよね？潤矢先輩、もっと二人で地獄を見よう！さっさと竹坊を助けようよ！」
夏輝の言葉に潤矢もニヤリと笑う。
「ナツっ！お前いいオトコになるぜ！よし！二人でガッツリ地獄巡りするから覚悟しろ！」
そう叫ぶのと同時に、潤矢はさらに深くペニスを挿入して、夏輝の身体を抱きしめた。二人の肉体が密着すればするほど電撃は威力を増して二人の苦痛は倍々ゲームで増えるのだ。
「がはああっ！」
潤矢と夏輝は激痛で悲鳴すら上げられずにのたうち回った。
「じゅんや！なつてる！もうやめてえ！」
それまで声を失っていた竹坊が、それまでで一番大きな声で叫ぶ。
相変わらずキリンの光の触手に捕らえられているが、最初にくらべてかなり顔色が良くなっているのがわかる。
「もうやめてえ、ぼくはもういいから、やめてええ」
泣きながら叫ぶ竹坊に、潤矢と夏輝は全身に脂汗を流して激痛に震え悶えながらも、苦笑気味の笑顔で応える。
「このくらい大丈夫だから、お前は無事に逃げることを考えろ」
「そうっす！わかたけ館のオトコはこんなの平気だし！」
潤矢と夏輝の言葉を受けて、竹坊の身体から強い光が溢れだしてきて、首輪の色が七色に目まぐるしく変わっていく。
「やったぞ！誓願成就だ！」
竹坊の様子を見て、キリンは狂喜する。
「これで竹坊は俺の意のままだ！理不尽な性的拷問で流れ込んだ負のエネルギーが竹坊の意識を消滅させて、竹坊はただの力の塊になる！」
キリンの言葉に、騙されていた事に気づいた潤矢と夏輝が慌てて竹坊に駆け寄ろうとするが、さらに圧倒的な光の奔流に阻まれて身動きすらできなくなっていく。
「竹坊っ！」
「だいじょうぶ。じゅんや、なつてる、ありがとう！」
そう静かに告げる竹坊は、意識が消滅するどころかさらに強い意志をその目に宿して、キリンを睨みつけている。
「…なん、だと？」
異変に気付いたキリンに竹坊は険しい表情で告げる
「負のエネルギーなんて無いもん！じゅんやとなつてるがくれるエネルギーは、ぼくのためを思ってくれる、あったかい力だけだもん！」
どんなに理不尽で過酷な性的拷問を受けても、全ては竹坊のためにという思いが負のエネルギーにはなるワケがなかったのだ。
「そんなバカな！」
「じゅんやとなつてるのおかげで、ぼくも、もっとできるようになる」
迸る光がさらに強まり、竹坊は自分の勃起包茎ペニスを扱き始めた。
「あああああん！」
竹坊の初射精と同時に首輪が砕け散り、溢れかえる光の奔流に吹き飛ばされてキリンはウッドデッキから転落していった。

「実は、入寮した頃からずっと思ってたんすけど、寮長、キリン先輩ってチンポがデカくて、すごくカッコいい体してますよね」
夏輝は楽しそうに言いながら、背後から全裸のキリンの肉体を両手で撫でまわしていく。
そんな夏輝自身も全裸で、半剥けチンポは完全勃起していた。
「そりゃあ、キリン先輩はオレの前任の『わかたけ息子』だからな」
潤矢の言葉に夏輝は納得の表情で頷く。

あまりに不可思議で過酷な夜が明けて、ＯＢの男性達は例年を遥かに超える現役学生のサービスに大満足して帰っていった。
しかし、現役学生達はキリンこと寮長の処遇を解決するために施設に居残っているのだ。
そしていま、キリンこと寮長の倉敷貴倫は、昨晩とおなじウッドデッキで全裸に剥かれて大の字で拘束され、革の首輪を着けられていた。
さらに金玉を根本で括られて小玉スイカを吊り下げられ、両乳首はクワガタに挟まれている。
結局、夏らしい快晴の空と入道雲にセミの声、山らしい清涼な風が吹くウッドデッキで夏の日を浴びながら、全裸の男子高校生が後輩の男子中学生や男子高校生に輪姦されようとしていた。
「竹坊、本当にコレだけでいいのか？」
夏輝はあらためて竹坊に尋ねる。
「うん！これですっきりおしまい！」
キリンの野望は阻止されたが、その後のキリンの処遇に困り果てた末の、潤矢達の結論だった。
わかたけ館の寮生としてキリンの行いは許せないが、かといって座敷童が暴行されました、とは警察に言えないのだ。
そして潤矢と夏輝も、結果的に竹坊の成長に役立った以上、自分達へ行われた理不尽で過酷な性的拷問についても許す事にしたため、結局は、わかたけ館流のお仕置きということになった。
何より、竹坊がキリンを許すというのであれば、それ以上他の寮生がいうことは何もない。
「では、トップバッターとして竹鋸学園中等部一年生、ラグビー部でわかたけ館の結城夏輝、高等部三年生の倉敷貴倫先輩のアナルを使わせていただきます！いただきまあ～す！」
夏輝の半剥け勃起ペニスが、キリンのアナルに突き入れられる。
「っく！」
キリンは頬を上気させて歯を食いしばるが、特に取り乱すこともなく後輩のペニスを受け入れた。
夏輝は実質二回目のアナルセックスにもかかわらず、強弱をつけた腰使いでキリンのアナルを深く浅くと抉っていき、その振動で小玉スイカが動いてキリンの金玉を激しく苛むために、すぐにキリンの全身から脂汗が噴き出してくる
「キリン先輩、辛かったら声出してくださいね？」
夏輝はニヤニヤしながらそう言うが、キリンはキっと夏輝を睨むだけで頑なに無言を貫く。
ただし、アナルは素直に差し出して夏輝の好きなように蹂躙させているので、懲罰としての輪姦は受け入れるつもりのようだ。
「ナツ、お前、大物になるよ」
潤矢はちょっと引き気味に苦笑する。そしてキリンに語り掛ける。
「…キリン先輩、マジでこれで全部水に流しましょう。オレはまだキリン先輩のことを尊敬してますから」
無言で下を向くキリンに、竹坊がクワガタを見せる。
「ねえ、これ、このりっぱなちんちんにつけていい？」
竹坊は返事を待つことなく、キリンの亀頭の尿道口を挟ませる
「っ痛たあああ！」
皆の爆笑が夏の青空に吸い込まれていった。

ブリ

「じゅんやのおちんちん、やっぱりすごくいいね！」
竹坊はご満悦な様子で腰を上下して潤矢の完全勃起したペニスをアナルから出し入れしていく。
わかたけ館のホールにある談話スペースのソファで、全裸の潤矢は全裸の竹坊に股がられて、チンポを喰われていた。
「たけぼうっ！竹坊のアナル凄すぎ！三こすり半で射精しちまう！お前なんか変な力使ってるだろ！」
潤矢は無様なアヘ顔を晒しながら呼吸を荒げて抗議する。
「え～？そんなことないよ～？」
そう言いながら竹坊のアナル周辺から不可思議な光が湧き出てくる。
「竹坊っ嘘はついちゃダメだぞ！」
「は～い！ごめんなさ～い」
でも、アナルの光はどんどん増えていく。

衝撃の事件があった交流会から一週間、事件は関係者だけの極秘事項として秘匿され、わかたけ館はいつも通りに平和だった。
ただし、竹坊の『成長』は隠しようがなかった。
潤矢と夏輝の過激な性的拷問のおかげで射精できるようになった竹坊は、言語や言動も少しだけ大人びて、いままでの『幼児』から容貌に近い『児童』になった印象だ。
そして何より、いままでは寮生の性行為を見ていただけだったのが、自分自身も性行為をしたがるようになった。具体的には、チンポをアナルに入れたがるのだ。
今まで通り、主に潤矢が相手をしているが、それ以外の寮生のチンポも喰っているのを目撃されるようになった。
ただし、チンポの好みはうるさいようで、誰のチンポでも良いわけではないらしく、寮生の間では竹坊に食べてもらうチンポになるのが夢になっているらしい。

「たけぼお～！俺、なんで真裸で浮いてるんすか？」
潤矢が竹坊に喰われている傍で、夏輝がなぜか全裸に剥かれて空中に浮いていた。
寮生達は浮いていること自体は気にしていないが、最近は夏輝自身も有名人なので面白がって遊ばれてしまい、撮影はもちろん、ジャンプタッチで尻やチンポを弄られてオモチャになっていた。
「あ～！いじめちゃだめえ！それぼくの！」
竹坊の一言で、夏輝はさらに高く浮いていく。
「たけぼおお？なんでっすか～！」
たまらず叫ぶ夏輝に、竹坊はペロリと舌を出して笑う。
「おちんちんの、おかわり」

おわり

非常口
EXIT

夏コミ御来場の皆様　暑い中お疲れサマ～♪(定型)
今回は２０１１年冬コミ本の続編的なお話ですが
シレっと時系列的にシームレスになっております
細かい事は気にしないでね(笑)
絵の方も８年も経つと色々変化しておりますが
どれか一枚でもお気に入り頂ければ幸甚であります
イラスト担当　筍屋　takenokoya@yahoo.co.jp
竹藪館　　http://www.hi-ho.ne.jp/su-oh/keikoku.htm
（御意見　御感想ありましたら宜しくお願いします）

はじめまして＆おひさしぶりです。
へたれ文字書きのた～んけーです m(_ _)m
今回はストレートに既刊の続編です。
前の本をお読みでなくても（忘れても）大丈夫なはずですが、
気になる方は「歳末 CountDownBoys！」も読んでみてね！
まあ、結局は筋肉少年をいかに脱がせて嬲るかですよ！
どこかー場面でも、皆さんの琴線に触れられたら幸いです。

２０１９年８月　た～んけー
turn_k_vf@yahoo.co.jp

夏休み CountDownBoys!

２０１９年８月１０日　初版発行
発行/筍御飯ＶＦ
著者/筍屋＆た～んけー
印刷所/株式会社　プロス
連絡先/turn_k_vf@yahoo.co.jp

DiGiket.com

ショタっ子が
乗ってます